

本県関係者 現地で祈り



原爆死没者慰霊碑に献花し、手を合わせる西巻さん親子
＝6日午前、広島市中区、平和記念公園

広島平和記念式典

中学生や親子の姿も

広島は6日、原爆投下から71年を迎えた。高齢化などで本県遺族代表が参列できなかった平和記念式典には、県内から訪れた次の世代を担う中学生や親子連れの姿があった。オバマ米大統領の訪問後初めての「8月6日」。広島の中で活躍する本県関係者も特別な思いで祈りの日を迎えた。(石井賢俊)

世代、国境超え願いたい

平和を考える とちぎから

雲間からのぞく真夏の日差しが、平和記念公園の白いタイルに反射する。ひどく暑かったという71年前の朝を思わせた。

さくら市馬場、公務員西巻孝史さん(44)は次女の小学4年杏理さん(10)と共に、公園の原爆死没者慰霊碑に花を手向け、合掌した。
5日から広島市に滞在し、原爆ドームや広島平和記念資料館にも足を運ん

だ。「かつて広島に原爆が落とされた戦争があつて、その上に今の平和があることを知ってほしい」。そう願う父の隣で、杏理さんは「平和がずっと続いてほしい」と頭を垂れた。
式典は外国人の姿も目立った。これまでも多かったが、広島市によると、オバマ大統領が5月に広島を訪れて以降、大幅に増加。資料館の外国人来場者は1・4倍に増えたという。
「オバマさんが来たことで核軍縮に向けた動きが勢いづいている。広島が思いが全国に広がってほしい」。

市内で生まれ育ち、栃木市出身の妻と故人と結婚したのが縁で県人会設立に尽力した。
自身は原爆投下時、広島県外にいたが、自宅は爆心地から3キロ南。家の天井は飛ばされ、家族が被爆した。「たった一発で、多くの市民が犠牲になり、街は壊滅した。原爆は絶対使ってはいけない」
小山市生まれの広島市職員和泉淳之さん(46)はこの日午後、公園周辺で市民団体が行う集いなどの警備に当たった。
式典会場から慰霊碑越しに見える原爆ドームの地震

対策工事で、中核を担った。年月を重ね、ドームは老朽化が進む。「負の遺産だが、世界中の人にとっての平和の象徴。しっかり保存することで平和の推進に貢献できる」。71年目の「8月6日」、また確信を強くした。